

那珂30

—那珂遺跡群第75次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第714集

2002

福岡市教育委員会

序 文

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する那珂遺跡群第75次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで市岡健三様をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成14年3月29日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成11・12年度に博多区竹下5丁目433番において実施した那珂遺跡群第75次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸、坂本真一が行った。
3. 遺物の実測は長家、林田憲二、坂本、坂元雄紀が行った。
4. 製図は長家、坂本、小田裕樹が行なった。
5. 写真は長家が撮影した。
6. 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から6°西偏し、真北から6°18'西偏する。
7. 本書で用いる遺構番号は通し番号にし（一部欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は掘立柱建物（SB）、竪穴住居跡（SC）、土坑（SK）、溝（SD）、井戸（SE）、ピット（SP）である。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
9. 本書の編集・執筆は長家が行った。

遺跡調査番号	9971	遺跡略号	NAK-75
所在地	博多区竹下5丁目433番		分布地図番号 38-0085
開発面積	1,294.41m ²	調査対象面積	250m ²
調査期間	平成12年3月1日～平成12年4月14日	調査面積	360m ²
		事前審査番号	11-2-303

本文目次

Iはじめに	
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査体制	1
II調査の記録	
1. 調査の経過	1
2. 遺構と遺物	5
1) 墓立柱建物	5
2) 穴穴住居跡	5
3) 土坑	20
4) 井戸	21
5) 溝	22
6) その他の遺構と遺物	28

挿図目次

第1図 調査区位置図 1 (1/5000)	2
第2図 調査区位置図 2 (1/500)	2
第3図 調査区全体図 (1/100)	折り込み
第4図 遺構埋土図 (1/200)	折り込み
第5図 SB022・025及び出土遺物実測図 (1/80、1/3)	4
第6図 SC002・003及び出土遺物実測図 (1/60、1/40、1/1、1/3)	6
第7図 SC004・019実測図 (1/60)	8
第8図 SC004出土遺物実測図 (1/3、1/4)	9
第9図 SC019出土遺物実測図 (1/3)	10
第10図 SC005及び出土遺物実測図 (1/60、1/40、1/1、2/3、1/3)	12
第11図 SC006及び出土遺物実測図 (1/60、1/40、1/3)	14
第12図 SC007及び出土遺物実測図 (1/60、1/3)	15
第13図 SC009及び出土遺物実測図 (1/60、1/1、1/3)	16
第14図 SC011及び出土遺物実測図 (1/60、1/1、1/3)	17
第15図 SC016及び出土遺物実測図 (1/60、1/3)	18
第16図 SC018及び出土遺物実測図 (1/60、1/3)	19
第17図 SK020及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	20
第18図 SE021及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	21
第19図 SD001及び出土遺物実測図 (1/100、1/3)	23
第20図 SD010土層図及び出土遺物実測図 1 (1/40、1/3)	24
第21図 SD010出土遺物実測図 2 (1/3)	25
第22図 SD015・017実測図 (平面1/80、断面1/40)、及び出土遺物実測図 (1/3)	26
第23図 SD023・024及び出土遺物実測図 (1/100、1/3)	27
第24図 SP180実測図 (1/15)	28
第25図 その他の遺物 (1/3、2/3)	28

写真目次

写真 1 調査区西半部全景 (南から)	写真10 SC006窓 (南から)
写真 2 調査区東半部全景 (北西から)	写真11 SC018 (南から)
写真 3 SB022 (南から)	写真12 SC018窓 (東から)
写真 4 SC002 (東から)	写真13 SK020・SE021 (北東から)
写真 5 SC003 (西から)	写真14 SK020・SE021土層
写真 6 SC004・019 (南東から)	写真15 SD001土層
写真 7 SC005 (東から)	写真16 SD010 (南から)
写真 8 SC005遺物状況 (西から)	写真17 SD015・017 (東から)
写真 9 SC006 (南西から)	

I はじめに

1. 調査にいたる経過

平成11年7月27日付けで市岡健三氏より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区竹下5丁目433番の物件に関しての埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号11-2-303）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群（分布地図番号38-0085・遺跡略号N A K）に含まれているところである。申請者と協議の上平成11年8月17日に申請地内の試掘調査を行い、現況から75cmほどで鳥柄ローム面に至り柱穴等の遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。協議の結果共同住宅建設部分については遺構の破壊が避けられないため、平成11・12年度に発掘調査、平成13年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。

調査期間は平成12年3月1日～平成12年4月14日である（調査番号9971）。なお発掘調査は敷地面積1294.41m²のうち敷地ほぼ中央の共同住宅建設部分250m²を対象とし、それ以外を現状保存としてことで契約を締結したが、調査中の現地協議により工事作業スペース確保を目的として当初予定範囲より一回り大きく掘削する可能性が示されたため、申請者との協議を行った。この結果実際の調査面積は360m²となっている。遺物はコンテナ21箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては市岡健三様をはじめとして関係の皆様から発掘調査についてご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2. 調査体制

事業主体 市岡健三

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文課財課長 山崎純男

調査第2係長 力武卓治

調査庶務 文化財整備課 谷口真由美（前任） 御手洗清（現任）

調査担当 調査第2係 長家伸

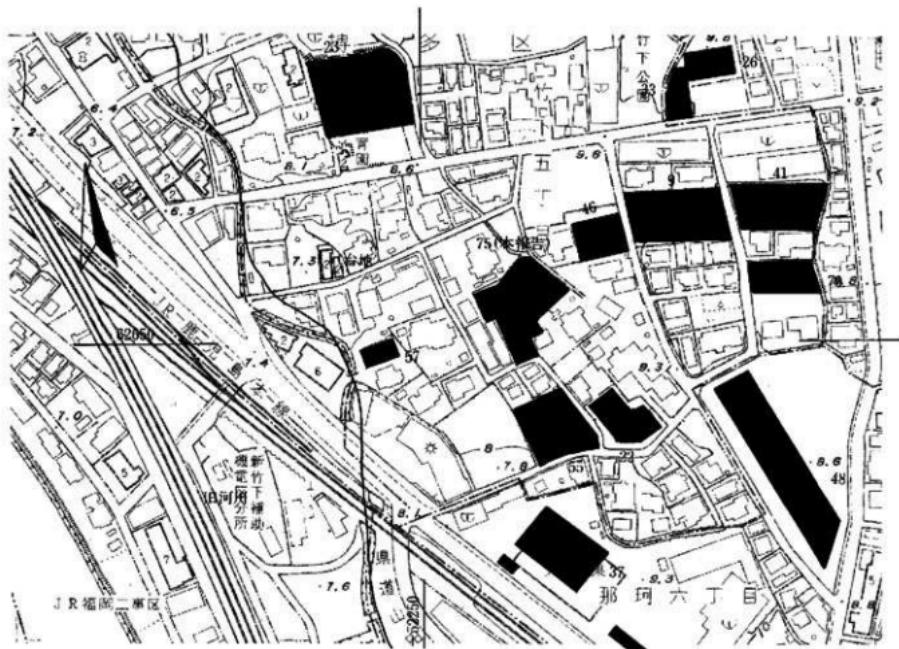
なお調査・整理作業には多くの方々にご協力を頂いた。ここで感謝の意を表したい。

II 調査の記録

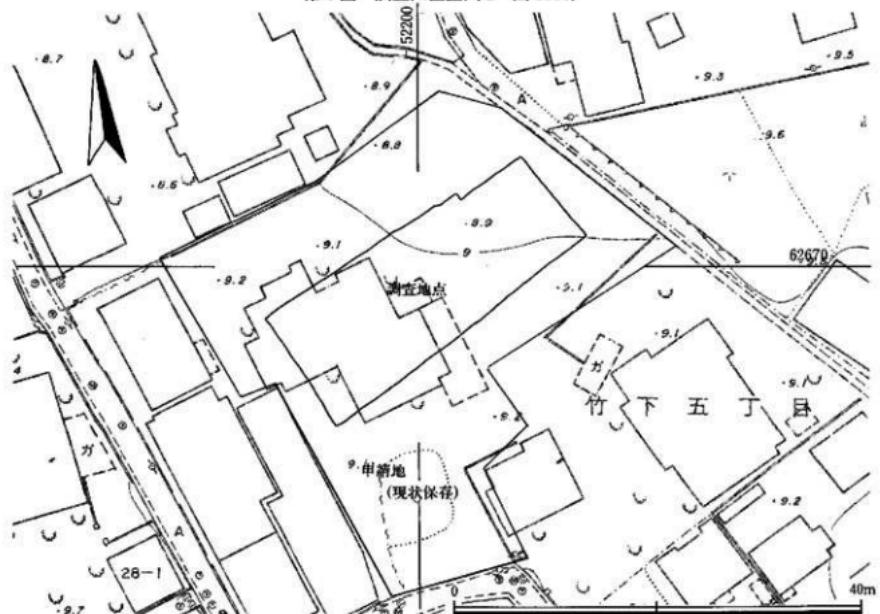
1. 調査の経過

那珂遺跡群は福岡平野の中央部分を北流する那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に立地する遺跡群である。丘陵の基盤層は花崗岩礫層で、この上面に阿蘇噴火灰砕流・火山灰である八女粘土層・鳥柄ローム層が堆積している。北側に隣接する比恵遺跡群とは一連の遺跡群を構成するものと考えられ、その範囲は南北2.4km、東西1kmに及ぶと考えられる。対象地は那珂遺跡群の南端部に近く、周辺の調査も比較的行なわれている地点である。なお既調査の概要は各報告を参照頂きたい。

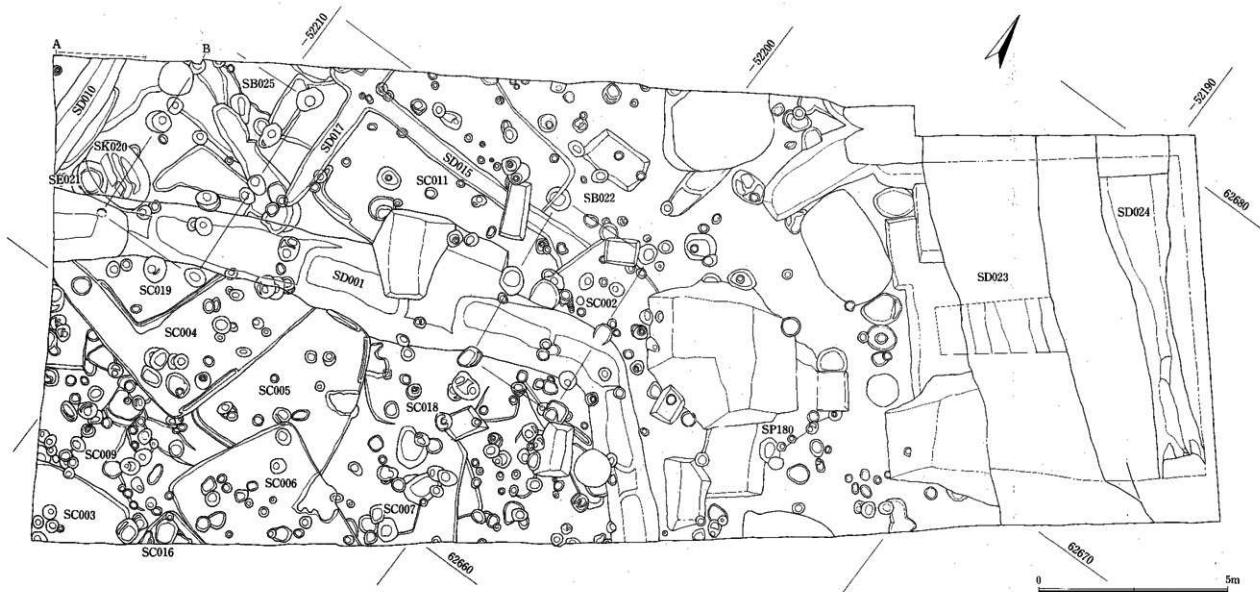
調査地点は調査前には駐車場として使用されており標高約9.1mを測るほぼ平坦な敷地であった。I章で述べたように調査対象地は申請地の中央部分で東西に長いほぼ長方形の範囲である。調査は重機による表土除去から行ったが、廃土処理の関係からまず対象地の西側ほぼ2/3を調査し、その後廃土を反転して残りの東側1/3を調査することとした。



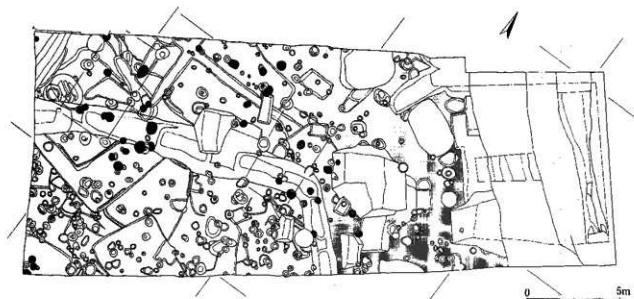
第1図 調査区位置図1 (1/5000)



第2図 調査区位置図2 (1/500)



第3図 調査区全体図 (1/100)



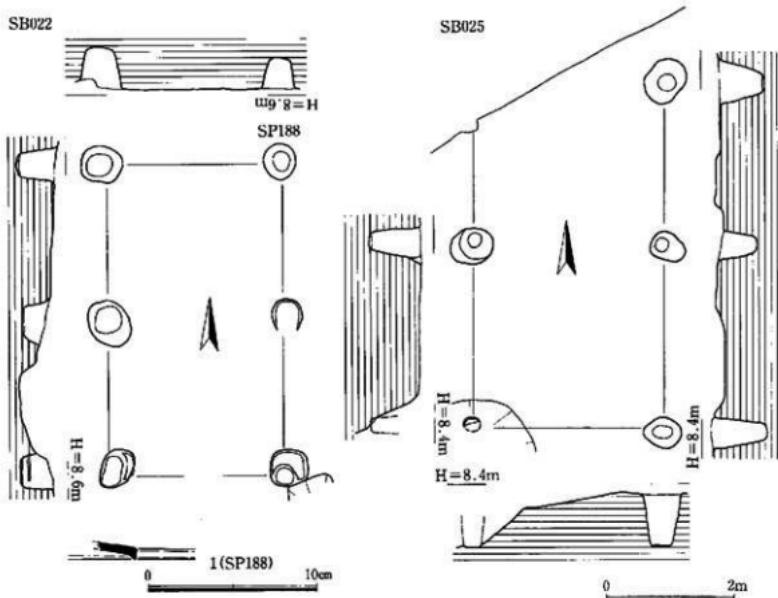
第4図 遺構埋土図(1/200)(濃アミは底標高7.9mより深いがまとめきれていないピット、薄アミは検出時地山露出部分)



写真1 調査区西半部全景（南から）



写真2 調査区東半部全景（北西から）



第5図 SB022・025及び出土遺物実測図 (1/80、1/3)

調査は表層のアスファルト・碎石・盛り土を50~60cmほど除去した鳥栖ローム上面で遺構検出を行った。遺構面の標高は南側の中央部分が最も高く8.7m、その他は約8.5mを測り、おおよそ調査区内では平坦となっている。本来的な地形は西側に向かって緩く傾斜しているものと考えられ、調査区の状況は後世の削平によるものと考えられる。東側の遺構の残存状況が西側に比べ甚しく不良なのもこのためであろう。調査区西側は古墳時代後期の竪穴住居を中心とした遺構の切り合いで非常に著しく、ローム面が露出する部分が極めて少なかった。西側は近世以降に掘削された南北に延びる流路があるためと、削平・攪乱のため遺構のあり方は比較的散漫であった。調査地点内の旧地形は大正木頃の地図などから東から西への傾斜があったものと考えられ、調査区東側においてはかなりの削平が行われたものと考えられる。東側に隣接する第46次調査の結果から考えても削平により失われた遺構（特に古墳時代後期の竪穴住居跡）が多いものと考えられる。

検出遺構は掘立柱建物、竪穴住居跡、溝、土坑、井戸、ピットがあり、時期的には弥生時代中期後半~近世までの遺構・遺物を検出している。主体となるのは古墳時代後期の竪穴住居跡で西半部分では特に切り合が著しく、調査時に認識できなかったものもあると思われる。その他該期の遺構として土坑1基がある。また弥生時代中期後半の井戸1基、古代の掘立柱建物2棟・溝3条、古代末~中世前半の溝1条、中世後半の矩形溝1条、近世の溝1条などが主な遺構である。

2. 造構と遺物

1) 挖立柱建物 (SB)

掘立柱建物は2棟を確認しているが、この他にも掘り込みはしっかりしているものの、掘立柱建物・竪穴住居跡として拾い上げることのできなかったピットも多く存在する。第4図に地山の露出部分をアミかけで表示しておく。また底面標高7.9m以下(遺構面からの深さ約60cm以上)のピットでまとめることが出来なかったものについても濃アミで表示する。

SB022 (第5図) 調査区中央で検出した1間×2間の建物である。主軸方位を磁北にとり、建物規模は梁行2.8m、桁行5mで身合面積は約14m²を測る。柱穴掘り方は一辺60cm程度の隅丸方形～円形で埋土は黒褐色土が主体となる。建物規模・方位などからSB025及びSD015・017との関連も想定できる。出土遺物から8世紀代に位置付けられる。

出土遺物 (第5図 1) 1は須恵器壺蓋の口縁部小破片である。口縁端部の立ち上がりは低く、低平な形状になると考えられる。

SB025 (第5図) 調査区西北端で検出す。北西側の柱を調査区外に延ばすが1間×2間の建物であろうか。主軸方位をN-1°-Eのほぼ磁北にとる。SD010・017にはほぼ平行しており、位置的な関係からこれらの溝に関連する建物の可能性も考えられる。また切り合い関係からSC019に後出するものと考えられる。建物規模は梁行3m、桁行5.6mで身合面積は約16.8m²を測る。柱穴掘り方は70cm程度の(長)円形で埋土は暗褐色土が主体となる。柱痕跡は確認できていない。出土遺物は少量で時期は不明瞭であるが、遺構相互の関係から8世紀代に考えておきたい。

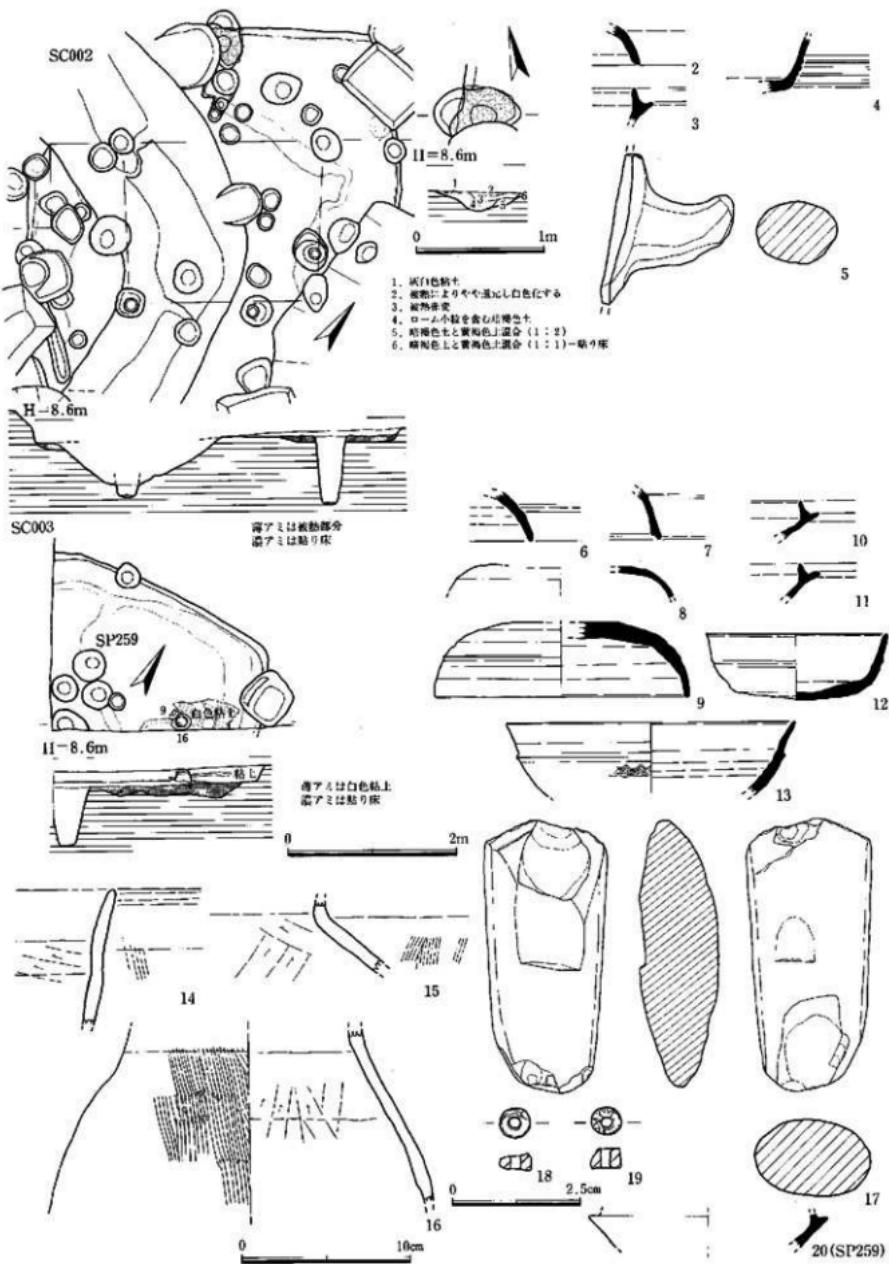
2) 竪穴住居跡 (SC)

竪穴住居跡として11棟を確認しているが、第4図に示しているように壁の確認ができず、埋土のみを掘り下げたもので壁・柱穴が不明なため報告で取り上げていないものもある。特に調査区北西隅の、SC011とSC019に挟まれた部分の土層では住居跡の埋土が確認できたものの(第20図 SD010土層11~13層)平面的に捉えることができなかった。また調査区東側は削平によって住居跡が失われたものと考えられ、本来的には更に多くの竪穴住居跡が存在したものと考えられる。また竪穴住居跡はいずれも古墳時代後期に位置付けられるものである。

SC002 (第6図) 調査区中央で検出す。SD001と搅乱坑により壁の多くを欠失する。支柱は4本で住居規模は一辺4.4mの方形に復元できる。西壁中央に竈が付設されているが壇体の粘土はほとんど認められなかった。竈は煙道を住戸外に出し、炊口部分は一度掘り込んだ後に埋め戻している。燃焼部の上面は被熱による還元・酸化面が50cm四方の範囲で広がっている。埋土は暗褐色上で、壁沿いにはローム混合土による貼り床が行なわれる。出土遺物は少量で土師器・須恵器の小破片のみである。小田編年のIVb期に位置付けられるものであろうか。

出土遺物 (第6図 2~5) 2~4は須恵器である。2は壺蓋口縁部である。残存部分の調整は回転ナデである。3は壺身である。立ち上がりは頗る、内外面回転ナデを行なう。4は小型高環の壺小破片である。外面下半には5条の沈線が施される。5は土師器の把手である。

SC003 (第6図) 調査区南西隅で検出す。北側と東側の壁の一部を検出す。北側のSC009との先後関係は不明である。また屋内主柱穴は不明であるがSP259がこれにあたるものであろうか。東壁から20cm程離れて白色粘土が広がっており、竈が付設されていたものと考えられるが、粘土除去後に被熱痕跡等は認められなかった。また粘土の前面には上師器壺が正置されていた。埋土は黒褐色上で、黒色土と暗褐色土によって貼り床が行なわれている。他の住居跡と比べ比較的古相の須恵器も出土しているが、10~12の資料から小田編年のIVb~V期に位置付けられるものであろう。



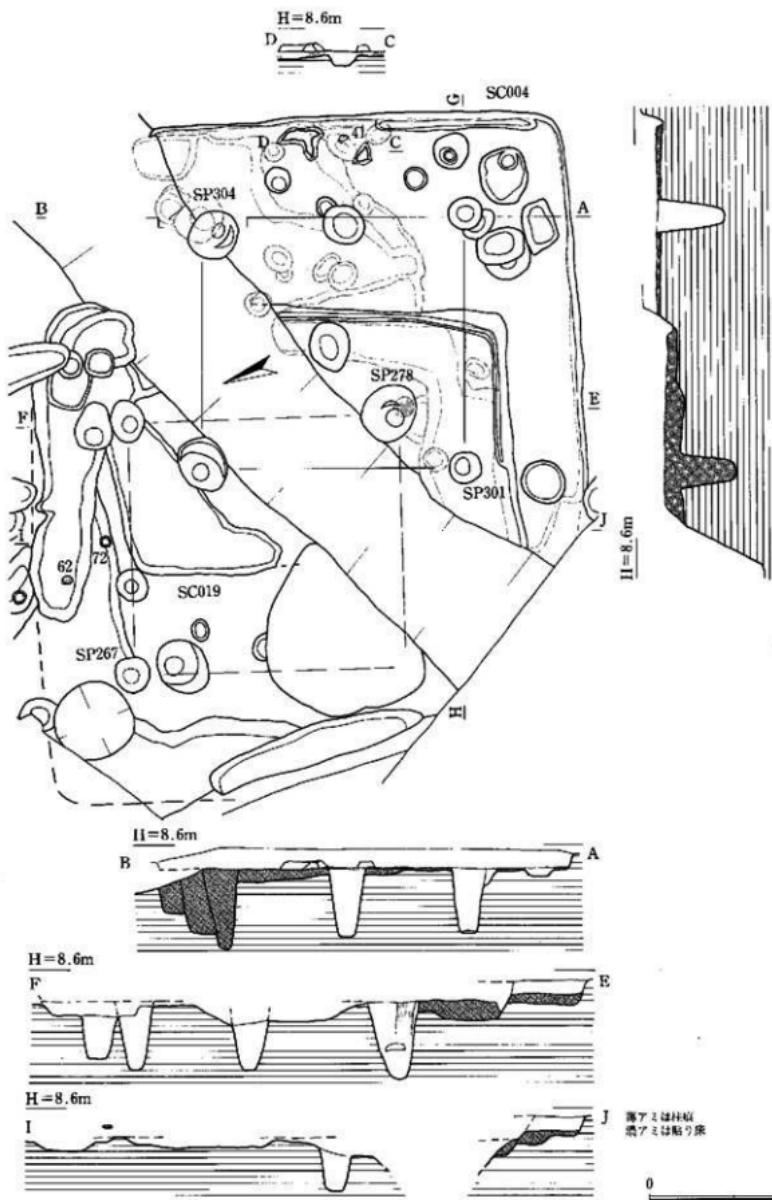
第6図 SC002・003及び出土遺物実測図 (1/60、1/40、18・19は1/1、その他は1/3)

出土遺物（第6図 6～20） 6～19はSC003埋上出土、20はSP259出土遺物である。6～13は須恵器である。6～9は环蓋である。6は端部を丸く上げる。7は口縁部と天井部の境に稜を有し、口縁端部内面には段が残る。8は天井部外面に回転ヘラ削りを行なう。9は竈付近で出土した1／2程度の破片である。復元口径14.8cmを測り、天井部外面には3／4程まで丁寧な回転ヘラ削りを行なう。口縁部との境には沈線を有する。また天井部内面には当て具の痕跡が残る。10～12は坏身である。10・11は立ち上がりは短く内傾している。12は復元口径10.6cmを測る。外底面はヘラ削り後未調整である。胴部中位に1条の沈線を有する。13は高坏である。明瞭な稜線を有し、稜線下には波状文を施す。14～16は土師器甕である。16は竈の一部と考えられる白色粘土付近に正置してあったものであるが、胴部下半及び口縁部は打ち欠かれているようである。いずれも胴部外面縦刷毛、内面ヘラ削りを行なう。17は玄武岩製石斧である。18・19は滑石製小玉である。20は須恵器坏身である。残存部は回転ナデを行なう。

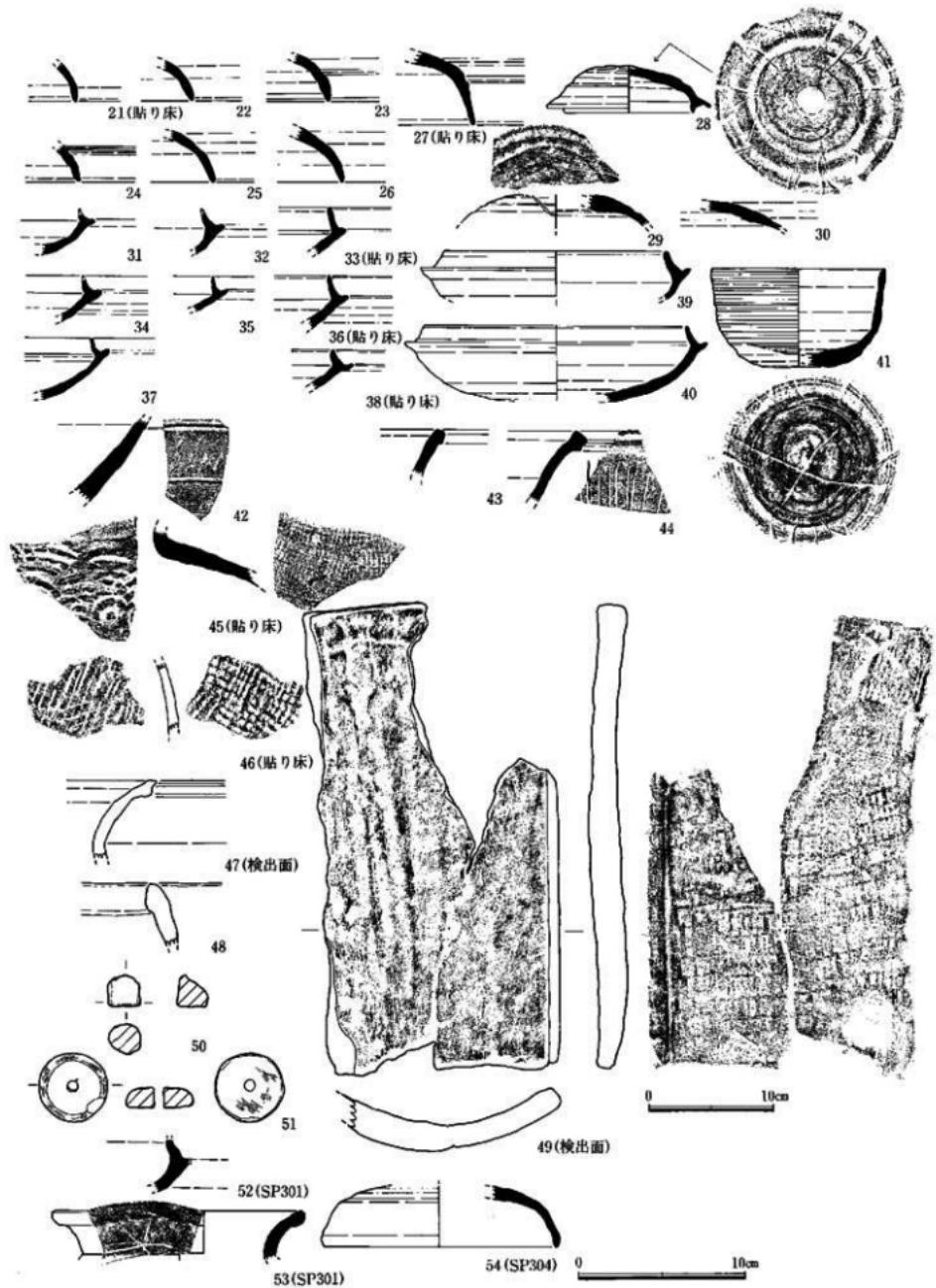
SC004（第7図） 調査区西端で検出する。SC009との切りあいは不明であるが、SC005→SC004→SC019の関係となる。主柱は4本で住居規模は東西長5.4m、南北長5.7mを測る。東壁中央に竈が付設されており袖部の一部分が確認できたが、被焼痕跡は認められない。燃焼部直下には焼土、炭化物粒を含む掘り込みが確認されている。埋土は検出面から15cmはロームをほとんど含まない暗褐色土で、これ以下はロームブロックを多く含んでいる。また床面全体に貼り床が行なわれるが、竈前面から北側の深い部分は黒色土、西側の浅い部分はローム混合土である。出土遺物はコントナ1箱程度ある。上面から瓦が1点出土するが瓦はこの1点のみである。小田編年Ⅳb期に位置付けられる。

出土遺物（第8図） 21～51は住居跡埋土出土、52～54は主柱穴出土である。21～45は須恵器である。21～30は环蓋である。21～27は小破片で残存部調整はいずれも回転ナデである。23・24には口縁部と天井部の境に痕跡的な沈線が残り、24は口縁端部内面に段を有する。27は古相を示すもので、器高が高く、外面の沈線も明瞭である。28は擬宝珠のつまみが消失したかえりを有する蓋である。29・30は天井部破片で、回転ヘラ削りを行なう。つまみ以外はほぼ完存する。天井部外面1／2に回転ヘラ削りを行なう。31～39は坏身である。いずれも小破片で36に回転ヘラ削りが認められる他は、残存部は回転ナデである。40は高坏の脚部を欠失し、接合痕跡が残る。天井部は蓋受けの付近まで回転ヘラ削りを行なう。41は碗である。竈袖間からの資料と竈下のピットから出土した資料が接合している。両資料は1個体を半載したもので、人為的な埋納に伴なう可能性も考えられる。胴部外面には全面にカキ目が施され、彫曲部から底部は回転ヘラ削りを行なう。42は器台破片である。突帯が削り出され、その下には波状文が施される。43～45は甕である。49は外面叩きの後カキ目状にナデしている。46～48は土師器である。46・47は甕である。46は外面格子叩き、内面平行當て具痕が残る。47は須恵器の端部形状を模している。48は鉢形の器形になるものか。端部を内側に折り返して肥厚させる。49は瓦である。凹面には布目及び模骨痕が残る。凸面は格子の叩きを行なう。50は径1.7cmの棒状の上製品である。51は滑石製鏡車である。52～54はいずれも須恵器である。54は復元口径13.8cmを測り、天井部1／3程度に回転ヘラ削りを行なう。

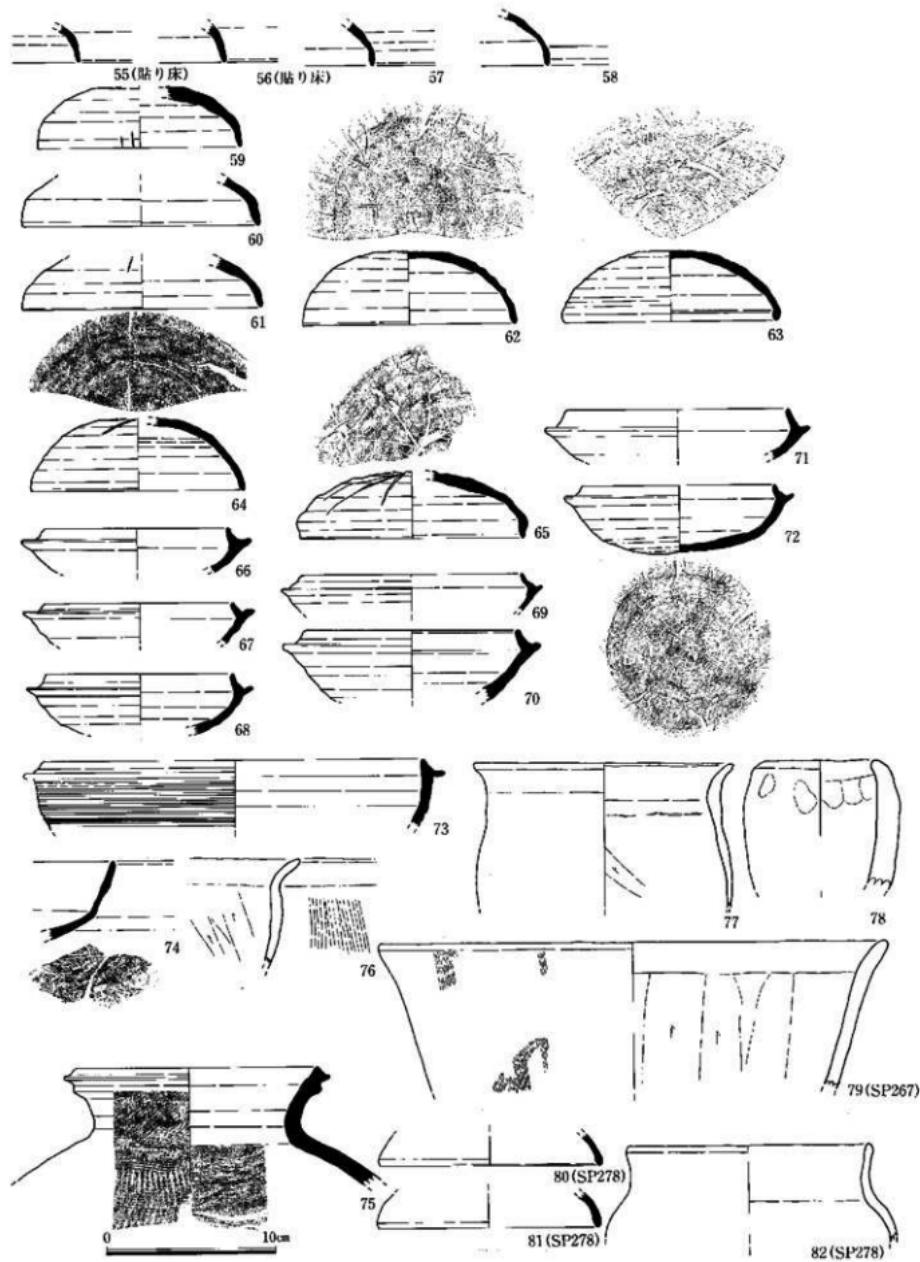
SC019（第7図） 調査区北西端で検出する。上層では一部SC004と同時に掘下げを行なってしまったが、SC004貼り床面を切って住居壁が検出できたため、SC004→SC019の関係を確認した。主柱は4本である。また調査時の不手際で先行する井戸の埋土と共に掘下げてしまっている。住居規模は一边5.6～6mの略方形に復元できる。竈は認められなかったが、おそらく切り合いにより失われたものと考えられる。住居埋土は暗褐色土で、四周の壁沿いに溝状の貼り床が行なわれている。貼り床埋土はロームを多く混合する暗褐色土である。土師器・須恵器が出土し、小田編年Ⅳb期に位置付け



第7図 SC004・019実測図 (1/60)



第8図 SC004出土遺物実測図 (49は1/4、その他は1/3)



第9図 SC019出土遺物実測図 (1/3)

られる。

出土遺物（第9図） 55～78は住居跡埋土出土である。55～75は須恵器である。55～65は壺蓋である。天井部が残存するものは回転ヘラ削りを行なっている。器形は全体に丸みを帯び、口径は縮小傾向を示す。62～65は比較的の残存状況が良好で、復元口径は12.6～13.2cmを測る。天井部外面にはヘラ記号を有するものが多く見られ中でも「×」印が殆どである。隣接するSC004で見られるヘラ記号とは異なっており、特徴的である。66～72は壺身である。いずれも立ち上がりは低く内傾する。72はほぼ完存する。立ち上がりの内径11.2cmを測り、外底面1／2は回転ヘラ削りを行なう。外底面には「×」印のヘラ記号が刻まれている。出土状況、口径、ヘラ記号の共通性から62と対になるものであろうか。73は大型の壺である。外面にはカキ目を施す。破片下端には2条の沈線が認められる。74は楕である。胴部から底部は丸みを帯び、外底面には回転ヘラ削りは行なわれない。75は蓋である。頸部外面にヘラ書き文を施し、胴部は平行叩きの後カキ目状の横ナデを行なう。76・77は蓋である。内面はヘラ削りを行なう。78は焰蓋である。79～82は柱穴出土である。79は土師器瓶破片である。80・81は須恵器壺蓋である。82は土師器蓋である。

SC005（第10図） 調査区西側で検出する。SC007・018→SC005→SC004・006の関係となる。主柱は4本で住居規模は東西長約4m、南北長4.5mを測る。東壁中央に窓が付設されており、屋外に張り出す煙道は確認できたが、袖部分は完全に破壊され灰白色粘土の高まりが検出されたのみである。

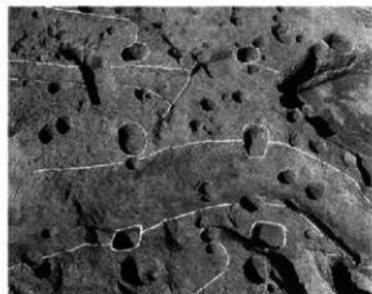


写真3 SB022 (南から)

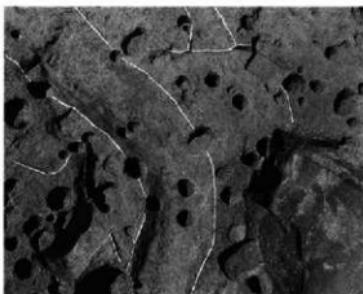


写真4 SC002 (東から)



写真5 SC003 (西から)

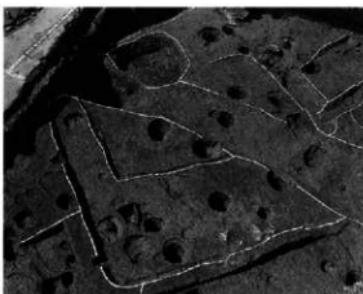
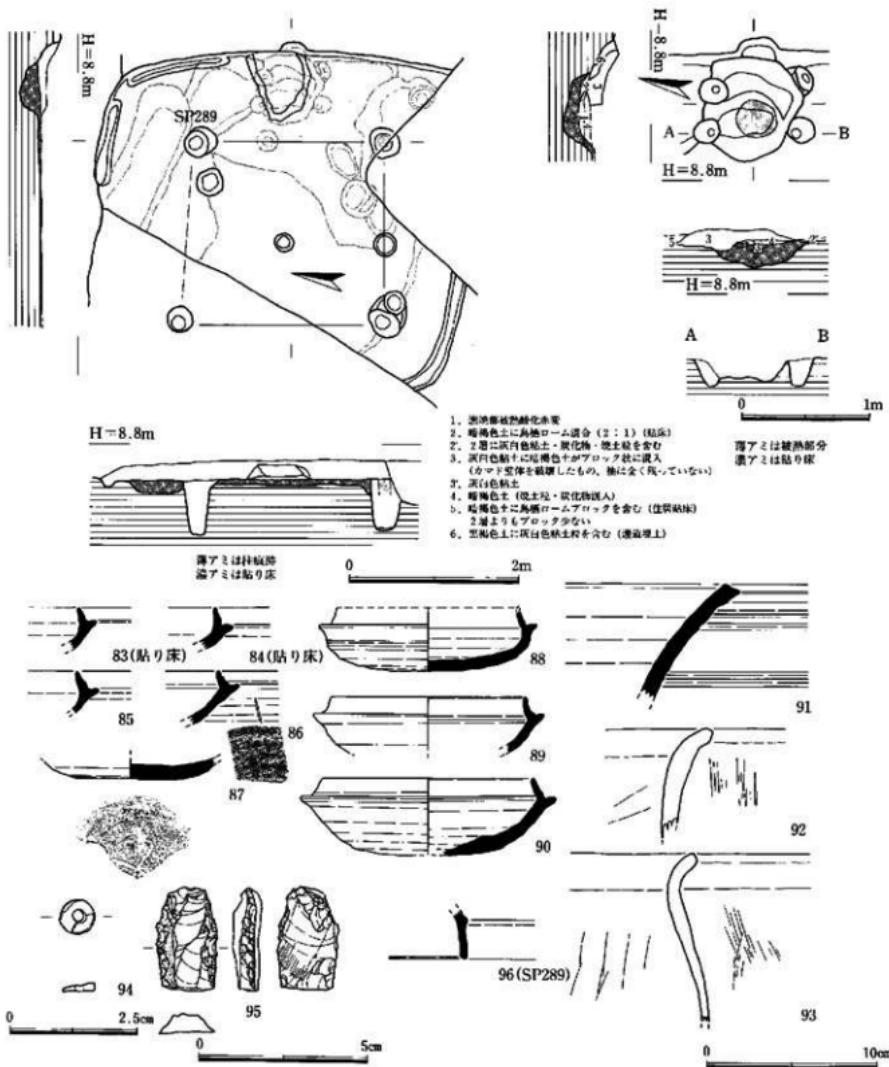


写真6 SC004・019 (南東から)



第10図 SC005及び出土遺物実測図 (1/60、1/40、94は1/1、95は2/3、その他は1/3)

燃焼部分上面には径30cmの凹形に被熱酸化部分が残っている。竈設置部分には一辺80cmの略方形の掘り込みが確認され、掘り込みの南北両辺に2基ずつのピットが掘り込まれていた。ピットは径20cm、深さ10~20cmである。ピットは竈の袖部分にほぼ対応する位置にあり、構築の際の木舞として木材を埋め込んだ痕跡と考えられる。住居埋土はやや茶味の強い暗褐色土で、床面中央部分を除いてローム

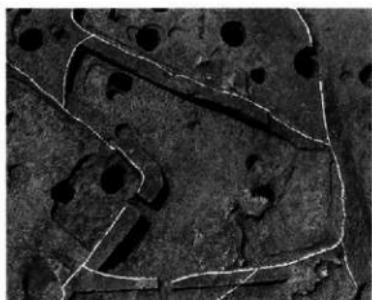


写真7 SC005(東から)

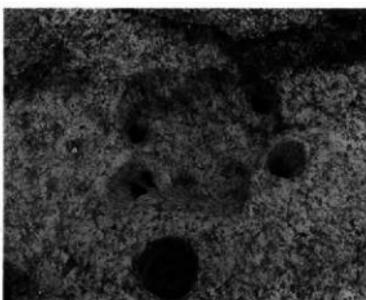


写真8 SC005竈完掘状況(西から)

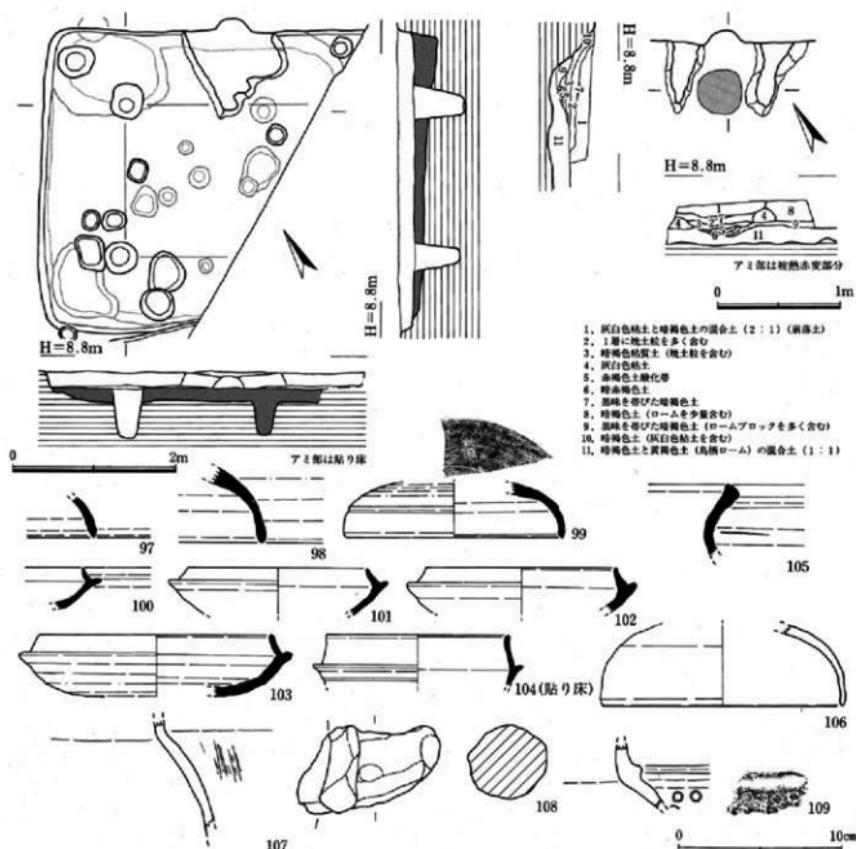
の混合土による貼り床が行なわれる。土師器・須恵器が出土しており小田編年Ⅲb～Ⅳ期に位置付けられる。

出土遺物(第10図) 83～95は住居跡埋土出土である。83～91は須恵器である。83～90は环身である。口縁端部の立ち上がりは比較的高めである。87は外底面回転ヘラ削りを行い、ヘラ記号を有する。88は古相を示す。体部はあまりすばまらず外底面に至る。ヘラ削りも受け部付近まで行なわれている。90は立ち上がり径12.4cm、器高4.5cmを測る。外面のヘラ削りは1／2まで行なわれる。91は壺の口縁部破片である。92・93は土師器甕である。胴部外面縦刷毛、内面ヘラ削りを行なう。94は滑石製小玉である。95は漆黒黒曜石製スクリーパーである。縦長剥片を使用し、右側辺部に明瞭な調整痕が認められる。96は柱穴出土須恵器壺蓋である。外面の稜はシャープで、口縁端部内面には段を有する。

SC006(第11図) 調査区南西端で検出する。SC005→SC006→SC016の関係となる。南側が調査区外となるが主柱は4本で住居規模は南北長3.7m、東西長3.8m以上の長方形に復元できる。北壁中央に竈が付設されており、袖部分、屋外に張り出す煙道が確認できた。燃焼部分上面には径40cm程の円形に被熱酸化部分が残っている。土層観察から貼り床を行なった後に竈を設置していることが確認できた。住居埋土はやや暗い褐色土で、床面全体に5～15cmのロームの混合土による貼り床が行なわれる。また住居コーナー部分は更に10cm程深くなっている。土師器・須恵器が出土しており小田編年Ⅲb～Ⅳ期に位置付けられる。

出土遺物(第11図) 97～105は須恵器である。97～99は环身である。98・99には天井部に回転ヘラ削りを行なう。100～104は立ち上がりを有する环身である。104以外は立ち上がりは短く、内傾している。103は外底面2／3程に回転ヘラ削りを行なう。105は壺口縁部である。106は焼成土師質の壺蓋である。摩滅が進んでおり天井外面の調整は不明である。107～109は土師器である。107は竈から出土した甕の小破片である。摩滅が進むが外面縦刷毛が痕跡的に残る。108は把手である。109は甕の頸部突起下に竹管文が押捺される。

SC007(第12図) 調査区南西端で検出する。SC007→SC005→SC006の関係となり、SC018とは先後関係が不明である。住居東端のコーナー部分を検出するのみであるが、床面標高が8.55mで掘られた際調査時点では1棟の住居と考えたが、主柱が不明瞭である。西側にはSC005に切られる形で床面上に被熱痕跡が残り、上面に手づくね土器が乗っている。竈の痕跡と考えられるが粘土などは確認していない。竈埋土は黒味を帯びた暗褐色土で、SC006に切られる部分の貼り床は黒褐色土、他はローム



第11図 SC006及び出土遺物実測図 (1/60, 1/40, 1/3)



写真9 SC006 (南西から)

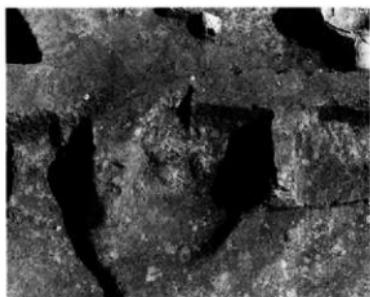
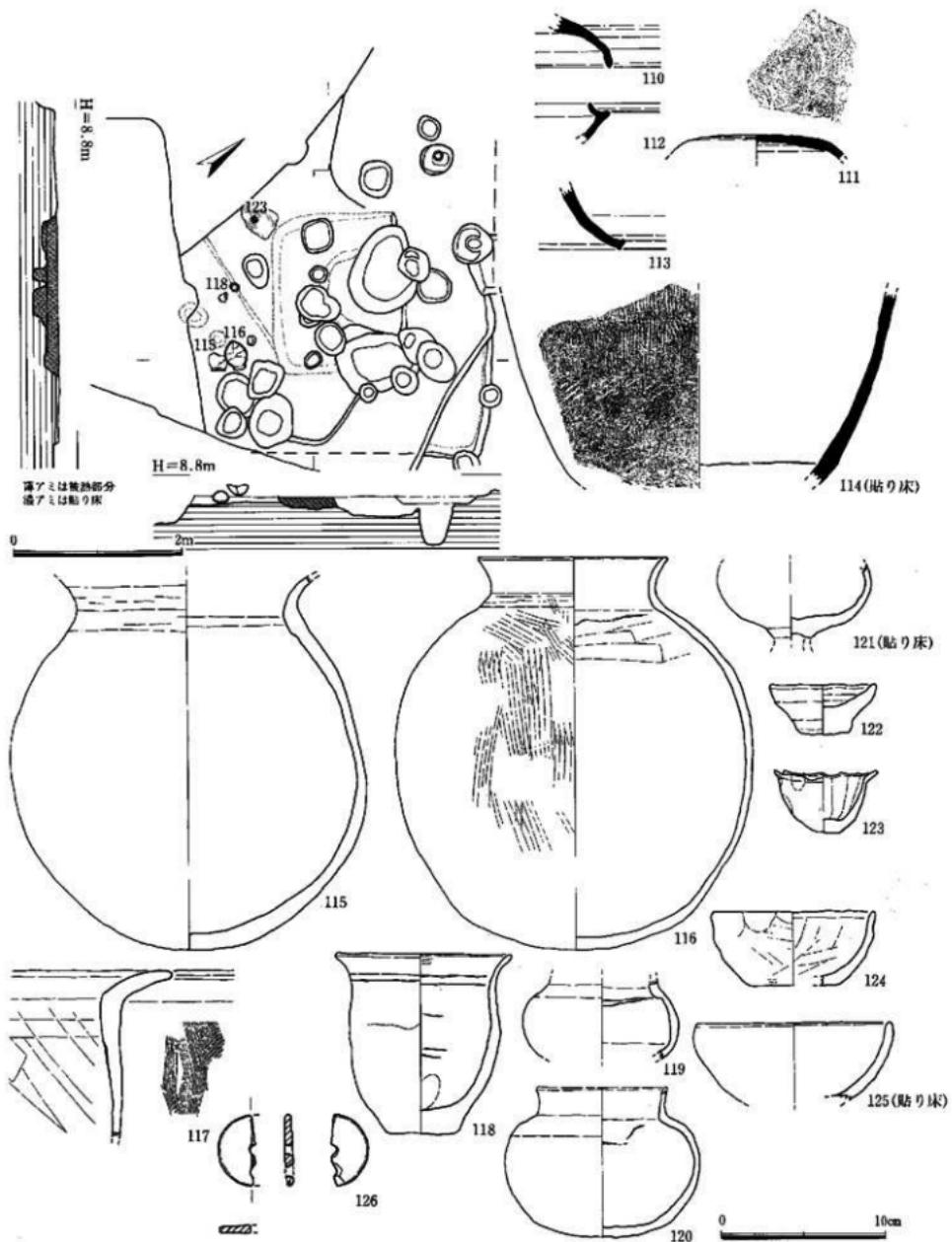
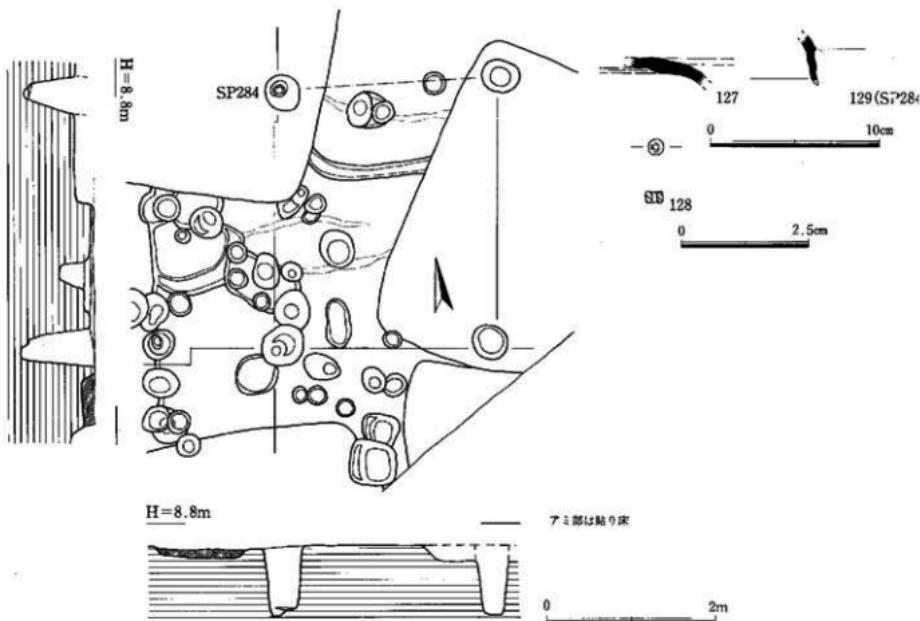


写真10 SC006窪 (南から)



第12図 SC007及び出土遺物実測図 (1/60、1/3)

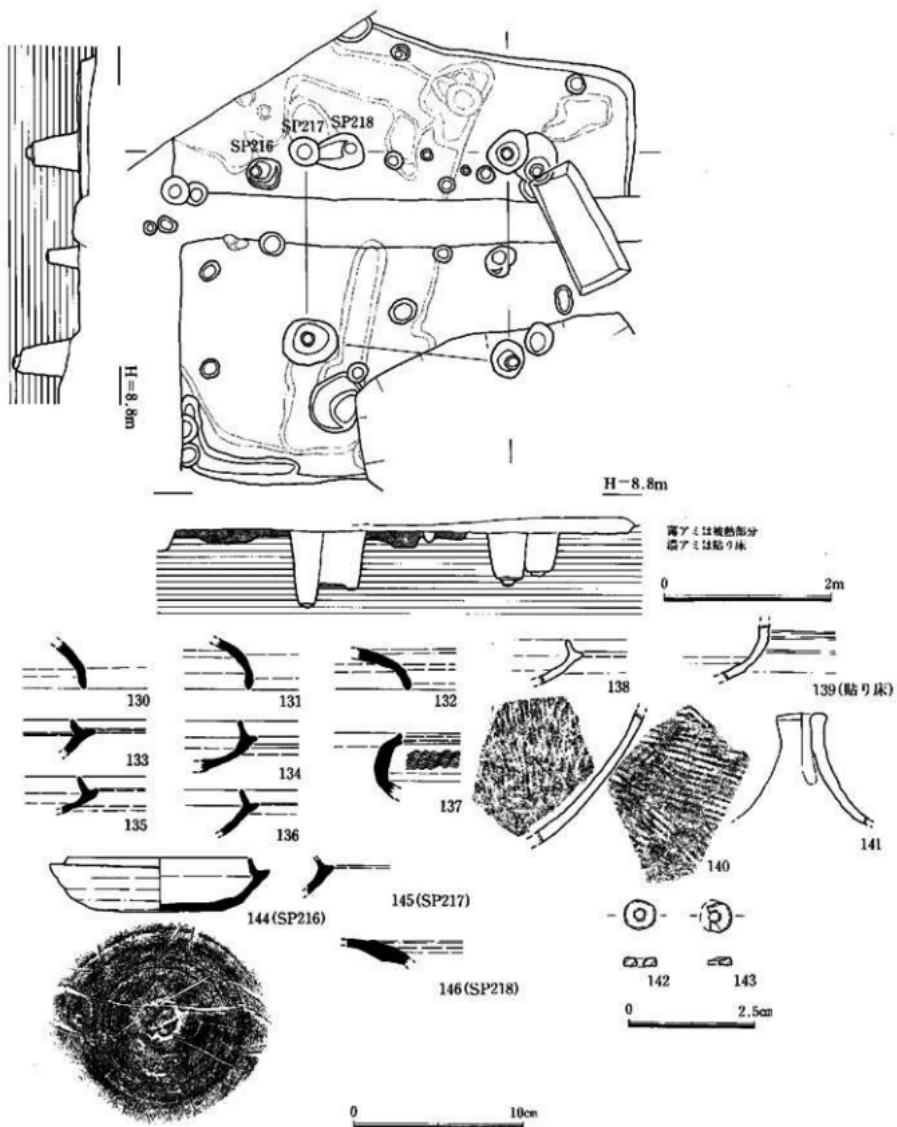


第13図 SC009及び出土遺物実測図 (1/60、128は1/1、その他は1/3)

混合土上の貼り床が行なわれる。小田編年のⅣ期に位置付けられる遺物が出土しているが、土師器の出土状況を見ると、南側で壺等が数個まとまる部分では時期的に古いものであるようである。また壺の位置・貼り床掘り方の方向などから、複数時期の遺構を同一にして報告している可能性が高い。

出土遺物（第12図） 110～114は須恵器である。110・111は环蓋である。111は天井部外面に回転ヘラ削りを行い、ヘラ記号を有する。112は立ち上がりが短く内傾する环身である。113は高环の脚部である。114は壺の胴部下半である。内面は調整をナデ消している。外面は屈曲部から7cm程は斜方向の平行叩きの後ナデ消しており、それ以上は縱方向の平行叩きを行なう。なお上部と下部とでは使用原体が異なる。115～125は土師器である。115・116は共に横倒して出土した壺で、いずれも球形の胴部を有する。115はほぼ完存し、胴部内面下半縦方向、上半横方向のヘラ削りを行なう。外面は不明である。116は1／2残存する。内面調整は115同様で、外面は縦刷毛を行なう。117は壺の破片である。内面は縦方向に削り上げる。118は手づくねの小型壺である。全面に指頭痕が残る。119・120は小型壺である。胴部は偏球形を呈する。摩滅が進み調整は不明瞭である。121は脚付きの椀である。122・123は手づくね土器である。123は被熱赤変部分の上部から出土する。124・125は椀である。124は内外面粗いヘラ削りを行なう。125は摩滅で調整不明瞭である。126は滑石製紡錘車である。

SC009（第13図） 調査区南西端で検出する。依存状況は不良で西側壁のみを検出し、周辺の整穴住居跡との切り合い関係は不明であるが、主柱がSC004・006の貼り床上面で確認できており、これらの住居に後出するものと考えられる。またSC003に切られる。埋土はロームブロックを含む暗褐色



第14図 SC011及び出土遺物実測図 (1/60、142・143は1/1、その他は1/3)

色上で壁沿いには浅い貼り床が行なわれ、掘り方は中央部分が高くなっている。上柱は4本でこの間隔から復元すると住居規模は一辺5.5m程度と考えられる。竈は本来設置されていたものと考えられるが、切り合いで欠失している。土師器・須恵器が少量出土するのみで時期は不明瞭である。

出土遺物（第13図） 127・128は住居跡埋土出土である。127は須恵器壊蓋であろうか。天井部外側は回転ヘラ削りを行なう。128は淡い緑色を呈するガラス製の小玉である。この他図示していないが滑石製小玉の残欠が1点出土している。129はSP284出土の須恵器蓋である。端部を欠損するが、屈曲部外面には明瞭な稜を有する。

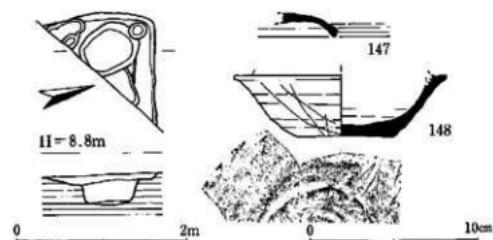
SC011（第14図） 調査区西よりの北側で検出する。SD015・017に切られる。上柱は4本で住居規模は一辺5.2mの略方形と考えられる。明瞭な竈の痕跡はなく粘土も確認できなかったが、西壁よりの床面に被熱痕跡が残っていた。位置的には竈の可能性が高いと考えられる。住居埋土はロームを含む暗褐色土で、床面西側半分にはロームの混合土による貼り床が行なわれる。本住居では4本主柱のうち南西1本をのぞく3本についてその東側に掘り方のしっかりした柱穴が存在しており、位置的には住居に伴う柱の可能性もあり、建て替え等の可能性を考えておきたい。小田編年のIVb期に位置付けられるものか。

出土遺物（第14図） 130～143は住居跡埋土出土である。130～136は須恵器蓋小破片である。蓋は器高が低平である。身は立ち上がりが頗る内傾する。137は須恵器壊口縁部である。外面に波状文を有する。138～141は土師器である。138は壊身である。調整は不明瞭であるが、回転ナデによるものと考えられる。139は楕である。胴部に2条の沈線を有し、外底面は回転ヘラ削りを行なう。140は外面擬格子の卯き、内面に平行當て具痕を残す甕の破片である。141は高环脚部である。142・143は滑石製小玉である。144～146は柱穴出土の須恵器である。144はほぼ完形の壊身である。立ち上がり径9.7cmを測る。外底面は1/2ほど回転ヘラ削りを行なう。145も壊身である。146は天井部外面回転ヘラ削りを行なう蓋である。

SC016（第15図） 調査区南西端で検出する。平面的にはSC006に切られると判断したが出土遺物から、SC006よりも後出する可能性が高い。埋土は暗褐色土である。出土遺物は少呈で時期は不明確であるが、小田編年IVb期以降のものであろう。

出土遺物（第15図） 147・148は須恵器である。147は口縁端部断面を三角形に作る蓋である。混入の可能性も考えられる。148は壊身である。外底面は未調整である。体部外面にヘラ記号を有する。

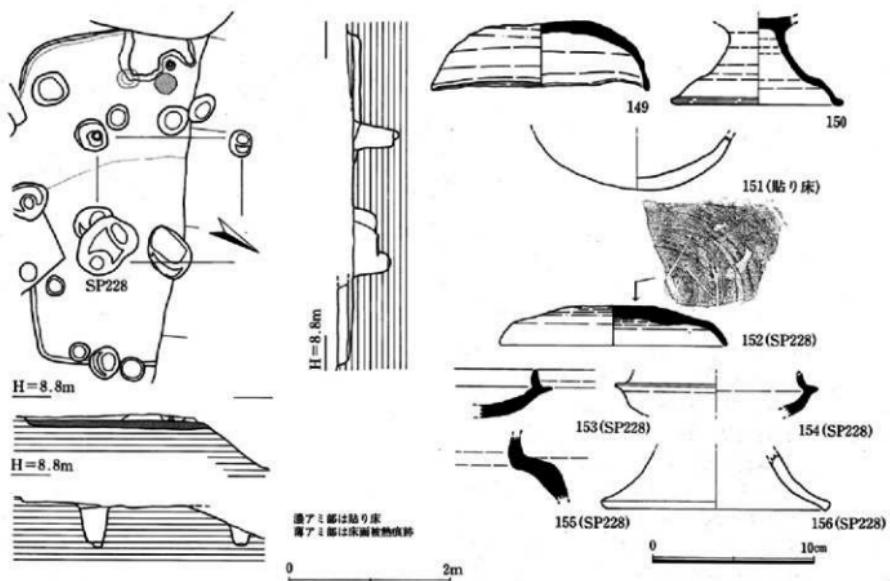
SC018（第16図） 調査区西側で検出する。SC018→SC005→SD001の関係となる。SC007・002との切り合は関係は不明である。北側半分はSD001に破壊されるが主柱は4本で住居規模は南北長3.5m、東西長4mの長方形に復元できる。本調査区内で最も小堀の堅穴住居跡で上軸の方舟も1棟のみ



第15図 SC016及び出土遺物実測図 (1/60, 1/3)

西に振れている。貼り床上面に竈が付設されており、白色粘土による袖が確認でき、須恵器の高壊が倒置されていた。またその前面には径25cm程の円形に被熱酸化部分が残っている。また貼り床は西側半分で確認できたが東側には行なわれていなかった。小田編年のIIIb～IV期に位置付けられる。

出土遺物（第16図） 149～151は住居跡埋土出土である。149・150は須恵器



第16図 SC018及び出土遺物実測図 (1/60、1/3)

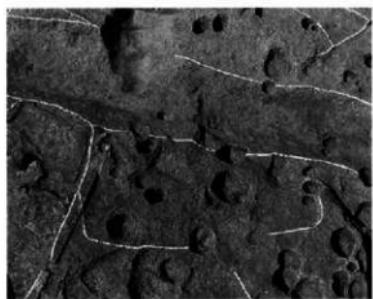


写真11 SC018（南から）

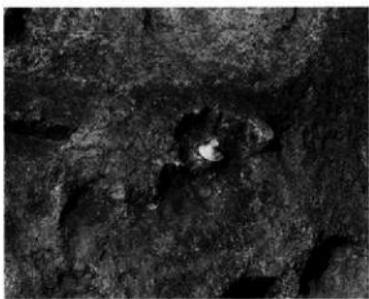


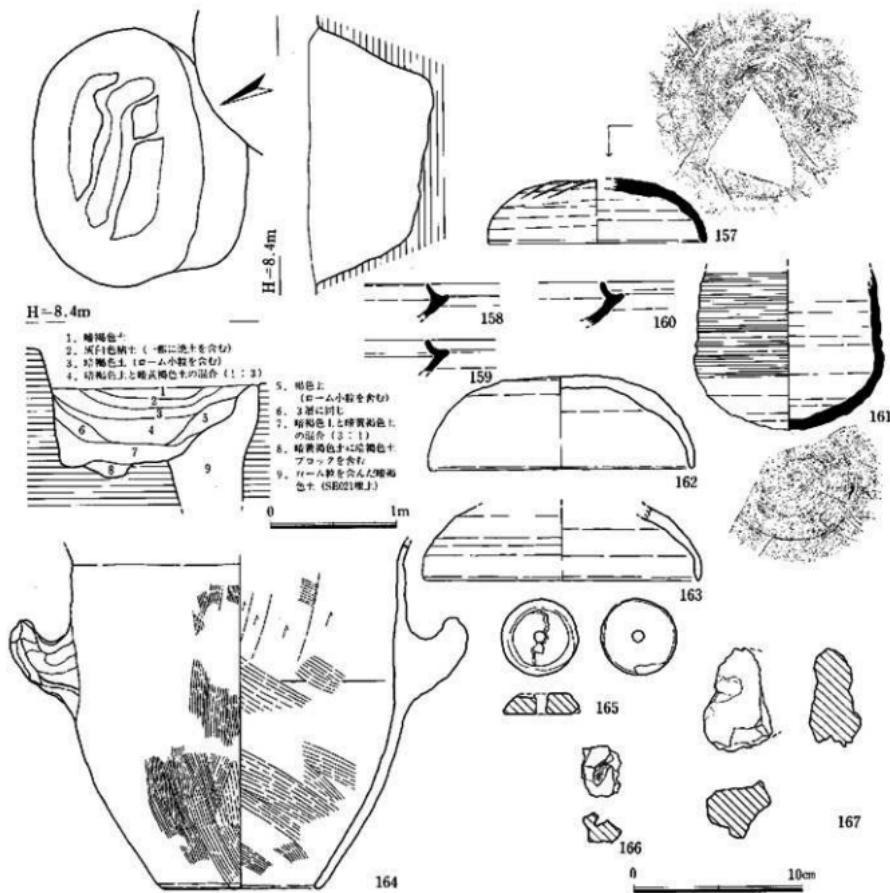
写真12 SC018甌（東から）

器である。149は口縁部の一部を欠く坏蓋である。口径13.2cmを測る。天井部外面にはややくぼんだ中央部分を除いて $1/3$ 程度に回転ヘラ削りを行なう。150は甌内から出土した高環脚部である。151は土師器焼である。外底面は手持ちのヘラ削りを行なう。152～156は柱穴出土である。152～155は須恵器である。152は天井部に回転ヘラ削りを行い、ヘラ記号を有する。153・154は坏身である。155は壺の肩部破片である。156は土師器高环の脚部である。端部は面取りを行なう。

3) 上坑

SK020（第17図） 調査区北西端で検出する。SD001→SK020→SE021の関係となり、SC019との切り合い関係は不明である。長軸2m、短軸1.7mの長円形を呈する。底面は長軸方向に向側に平坦面を有し、検出面からの深さは1mである。埋土はレンズ状に堆積し、上層に粘土層（2層）が認められる。出土遺物には土師器、須恵器のほか2点の鍛冶滓がある。小田編年Ⅲb～Ⅳ期に位置付けられる。

出土遺物（第17図） 157～161は須恵器である。157は壺蓋で口径12.6cmを測る。天井部外側には回転ヘラ削りを行い、ヘラ記号を有する。158～160は壺身である。立ち上がりは短く、内傾する。160は椀である。胴部外側にはカキ目を施し、下位に2条の沈線を有する。また胴部最下部から外底面に

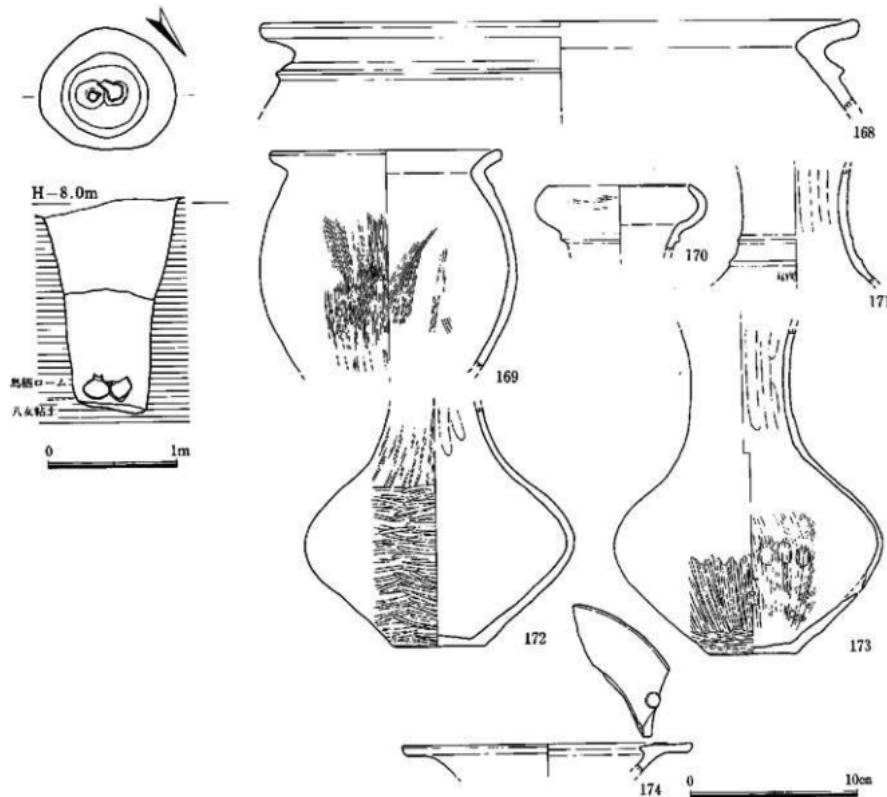


第17図 SK020及び出土遺物実測図（1/40、1/3）

は回転ヘラ削りを行なう。162～164は土師器である。162・163は壺蓋である。器面は摩滅が進む。回転ナデにより整形され、円上部には回転ヘラ削りを行なったような稜線が残る。164は瓶である。外向縦刷毛、内面横刷毛の後上部にヘラ削りを行なう。165は滑石製の紡錘車である。166・167は銀治津である。166は不定形、167は楕円形を呈する。

4) 井戸

SE021 (第18図) 検出区北西端で検出する。上部をSD001とSK020に切られている。上面径約1mの円形を呈する。井戸底標高は6.35mで、鳥柄ロームと八女粘土の境からわずかに掘り込んでいる埋土は検出面150cmまではローム小粒を含む暗褐色土でその最下位に丹塗り土器2個体(172・173)が据えられている。またこの土器周辺には丹塗り土器破片がほぼ前面に広がっていた。この直下は暗褐色土とロームの混合土が5cmほど堆積し、この下は底面まで5cmほど粗砂が堆積する。弥生時代中



第18図 SE021及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)

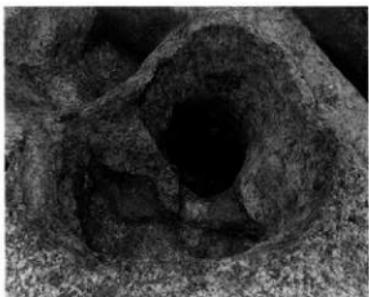


写真13 SK020 · SE021 (北東から)



写真14 SK020 · SE021 土層

期後半に位置付けられる。

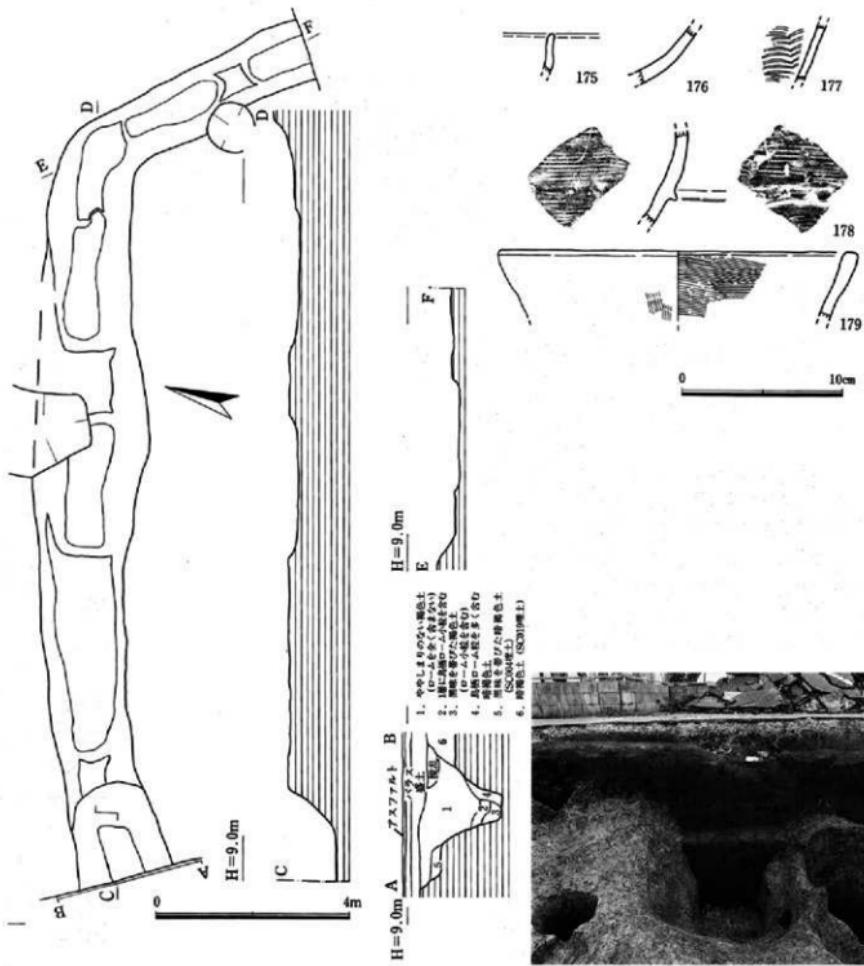
出土遺物（第18図） 168・169は甕である。168の口縁部は「く」字に屈曲し、口縁下に断面三角形の突帯を1条貼り付ける。外面横ナデを行なう。169の胴部は丸みを帯び、外面縦刷毛、内面縦刷毛の後ナデを行う。170～174は壺である。170は袋状の口縁部である。172・173の周辺から出土しており、接点はないもののこれのどちらかと接合する可能性が高い。外面は全体に赤色顔料が塗布され横方向のヘラ磨きを行なう。内面は剥落が著しいが赤色顔料の痕跡が部分的に残る。171は頸部破片である。剥落が進み詳細は不明であるが、突帯下に縦方向の磨きの痕跡がわずかに残る。顔料はまったく残存していない。172・173は底面付近で出土した個体である。172は頸部から上を失す。胴部外面及び底部外周に赤色顔料が残っている。胴部外面は下半2/3は横方向、上半部分は縦方向のヘラ磨きを行なう。173も外面に赤色顔料を塗布する。外面は胴部最下位は横方向、中位までは縦方向のヘラ磨きを行い、内面は下半に縦刷毛、胴部中位から上はナデによる調整を行なう。174は錐状を呈する口縁部である。口縁部上面から外面には赤色顔料が残る。また口縁部上端部には円形の浮文が貼り付けられる。

5) 溝

SD001 (第19図) 調査区中央から西側で検出した矩形に巡る溝である。検出面での幅1.3～2.1mを測り、断面形はほぼ逆台形を呈する。底面には細かな凹凸はないが、長軸方向に規則的な凹凸が認められる。溝底標高は凹凸の低い部分で7.8m、高い部分で8mであり、凹凸間の高低差は5～20cmである。また土層図を作製した西端は溝底標高7.1mで更に深くなっている。埋土は大半がややしまりのない褐色土である。切り合い関係から最新の遺構である。陶器、土師器、須恵器が出土しており、中世後半期に位置付けられる。本調査では該期の建物は確認できなかった。また同時期の遺物も殆ど見られない。

出土遺物（第19図） 175・176は青磁である。175は口縁部破片である。釉調は純い緑色を呈す。口縁端部に白色粘土の目跡が残る。李朝か。176は龍泉窯系碗IV類破片である。177は褐釉陶器破片である。内面に當て具痕が残る。178は瓦質の茶釜である。内外面に横方向の刷毛目が残る。179は土師質の鍋である。口縁端面は四角く仕上げ、刷毛目を行なう。内面横刷毛、外面縦刷毛が残る。

SD010 (第20図) 調査区北西隅で検出す。主軸をほぼ座標北方向にとる直線的な溝である。溝幅1m、検出面からの深さ1mを測る。断面は逆台形を呈するが、調査時点で掘りすぎたため平面図に

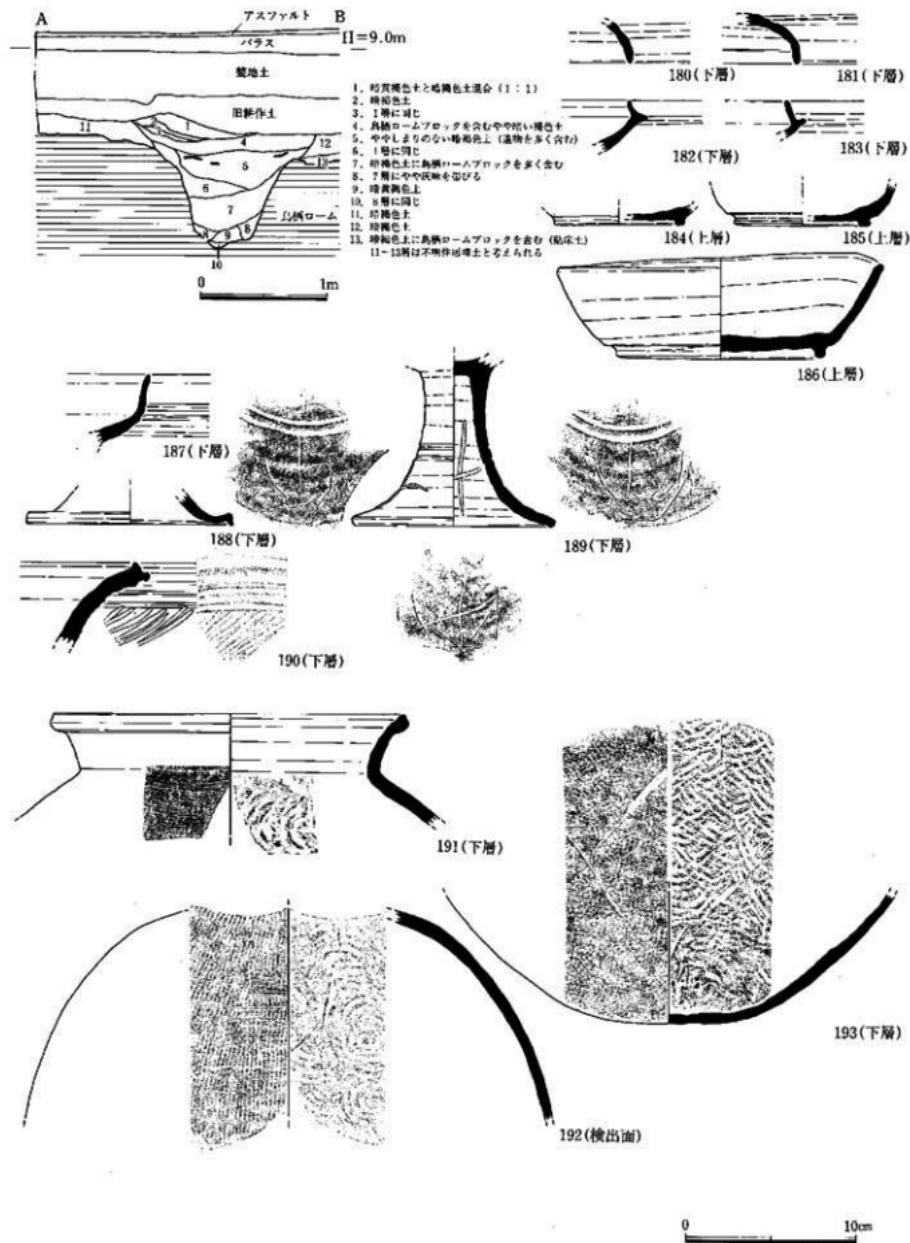


第19図 SD001及び出土遺物実測図 (1/100, 1/3)

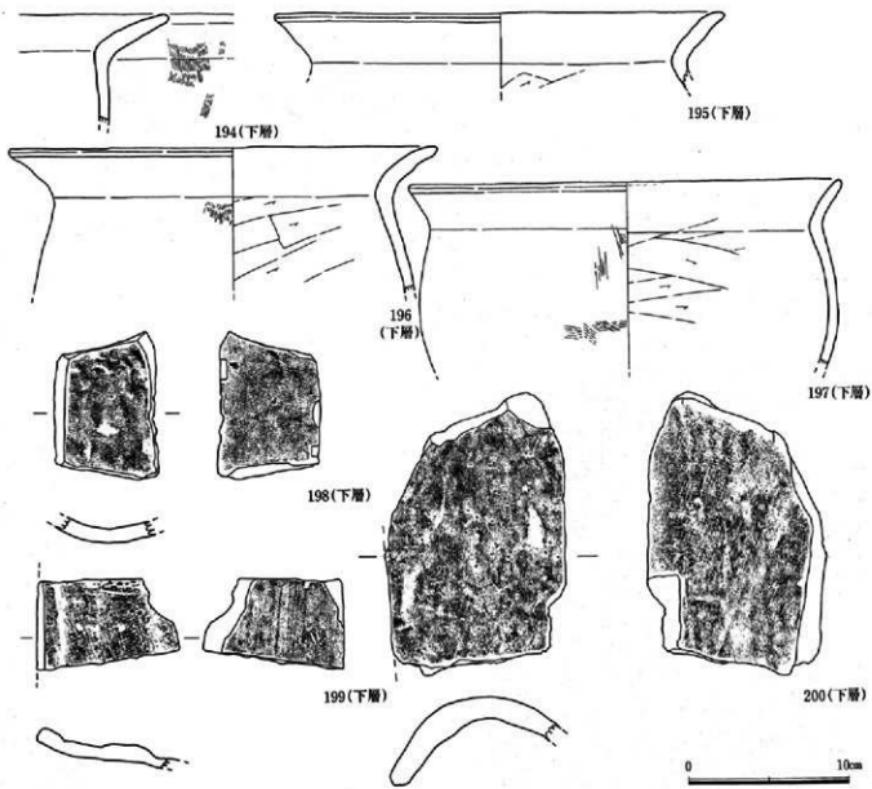


写真15 SD001土層

は表現されていないが溝底中央には幅15cm、深さ5cm程の掘り込みが溝状に長軸方向に行なわれている。出土遺物には土師器、須恵器のほかに瓦がある。調査当初は溝として20cm程掘り下げを行なったため一部竪穴住居跡の遺物(11層)が混入している。ここまで遺物を「上層」(ほぼ1~4層に対応)、以下を下層として取り上げる。出土遺物の傾向としては上層からは高台付きの楕が出土するが、下層からは出土しておらず比較的古相の遺物が主体となっている。同様の形態・直進性・時期を示す溝が、那珂遺跡群8次・32次・62次・63次・69次で確認されている。調査地点が断片的で、本調査地点がやや南に離れているため確定的ではないがほぼ直線的に延びるものとした場合総延長600m以上



第20図 SD010土層図及び出土遺物実測図 1 (1/40、1/3)



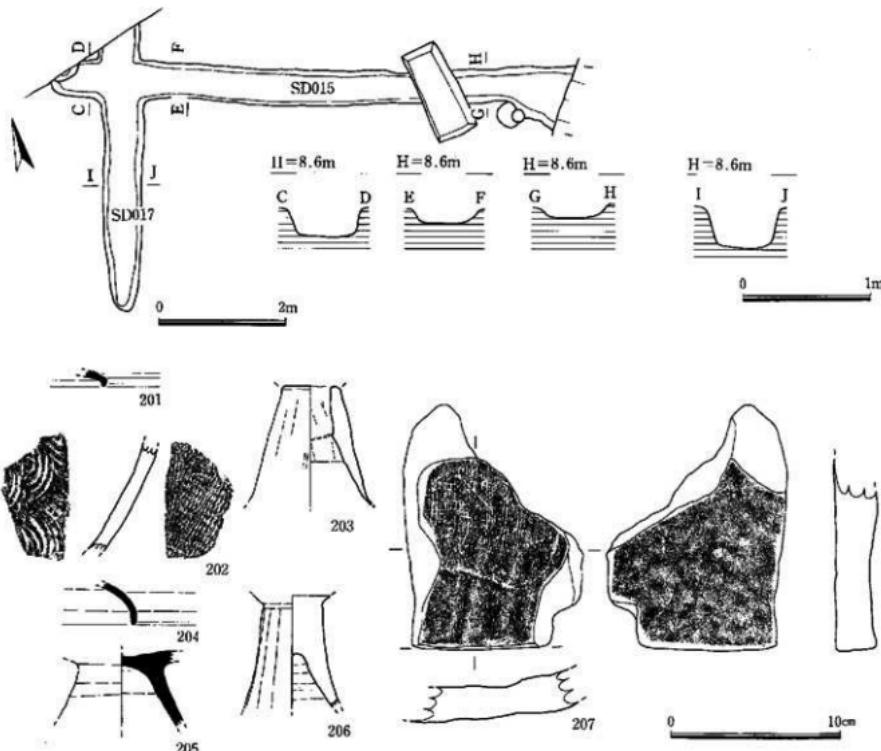
第21図 SD010出土遺物実測図 2 (1/3)



写真16 SD010 (南から)



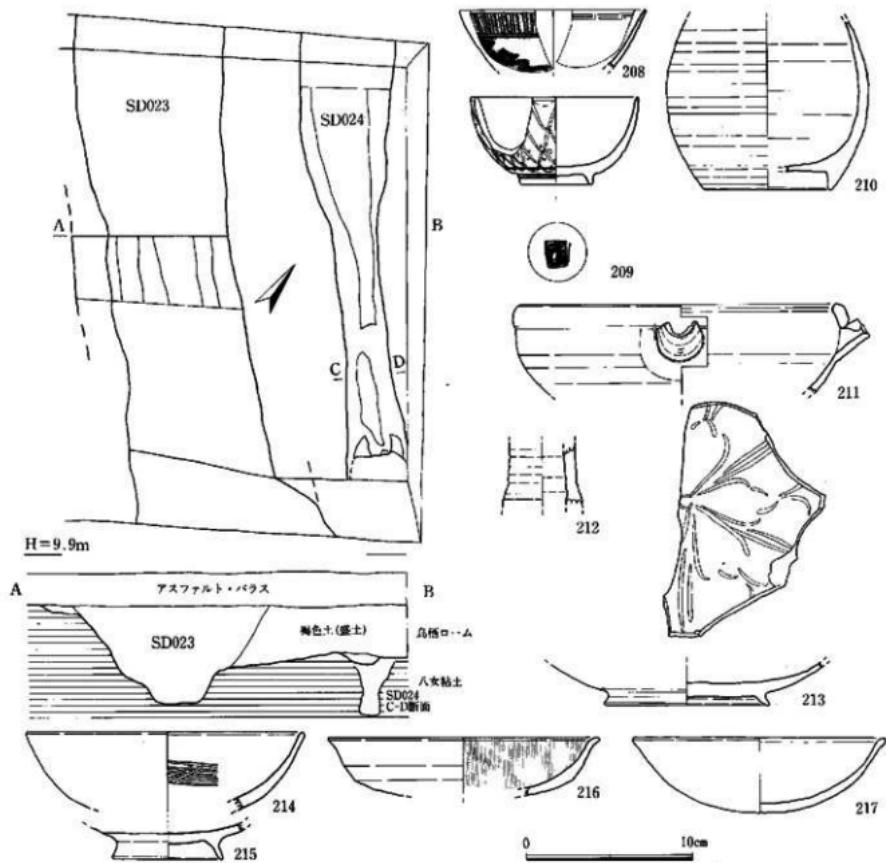
写真17 SD015・017 (東から)



第22図 SD015・017実測図（平面1/80、断面1/40）、及び出土遺物実測図（1/3）

となり那珂遺跡群をほぼ縦断する溝となる。いずれの調査地点でも溝通なく瓦の出土が見られ、官衙的造構の展間に関連する溝と考えられる。須恵器は8世紀中頃に位置付けられるものまでが出土し、その他土師器・瓦が出土している。

出土遺物（第20・21図） 180～193は須恵器である。180・181は壺蓋、182・183は立ち上がりを有する壺身である。184～186は高台付きの壺である。いずれも体部との境近くに低い高台が貼り付けられる。186は口径18.4cmを測り、外底面は回転ヘラ削りを行なう。187～189は高壺である。187は壺部破片である。屈曲部付近に2条の沈線が施される。188は脚据部である。190は脚部である。外面に2箇所、内面に1箇所「X」印のヘラ記号が刻まれる。190～193は甌である。190は外面にヘラ描き文が施される。191は口縁端部を玉縁状に仕上げる。胴部は外面叩きの後横ナデを行い、内面には青海波文の當て具痕が残る。192・193は胴部破片である。192は外面撫格子の叩きの後カキ目状の横ナデ、内面には青海波文の當て具痕が残る。193は外面格子叩きを行い、内面には青海波文の當て具痕が残る。194～197は土師器甌である。いずれも内面は横から斜位のヘラ削りを行う。外面は195以外は屈曲部付近から縱刷毛を行なう。198～200は瓦である。198は焼成須恵質で、



第23図 SD023・024及び出土遺物実測図 (1/100, 1/3)

凹面・凸面共にナデを行なう。199は焼成土師質である。凹面端部を肥厚させ、肥厚部分に沿ってヘラ状工具により直線的な刻みが残される。また凹面には布目が残る。凸面はヘラナデを行なう。200は上師質の丸瓦である。器面の摩滅が進んでいる。凹面布目、凸面ナデを行なう。

SD015・017 (第22図) 調査区西より検出する。SD017は方位を N - 4° - E にとり、SD015はこれに直行する溝である。共に竪穴住居跡をきる。SC002との切り合いは不明であるが、これを切って延びるものと考えられる。溝幅は50~80cm、深さ20cmを測り、断面浅皿状を呈する。またSD015の西端とSD017の南端は立ち上がって終息している。精査したが2条の間には切り合い関係は認められず、一連の遺構と考えた。機能は不明であるが、調査区西端のSD010も同一の方向を志向する溝で

あり、区割り等で何らかの関連を有する可能性も考えられる。出土遺物には土師器・須恵器の他瓦が1点出土しており、ここからもSD010とのかかわりが求められる。8世紀代に位置付けられる。

出土遺物（第22図） 201～203はSD015出土である。201は須恵器蓋である。口縁部は喟状に折れ曲がる。202は土師器甕である。外面縄目の印きを行なった後一部刷毛目を施す。内面には青海波文の当て具痕が残る。縄日の当て具痕を有する甕は瓦の整形との関連も想定できる。203は土師器高坏である。204～207はSD017出土である。204は須恵器壺蓋、205は須恵器高坏である。205は土師器高坏である。207は平瓦である。摩滅が進んでいる。凹面には布日が残り、凸面はナデによる。

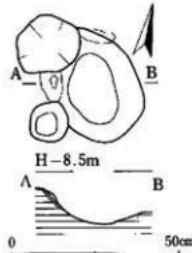
SD023・024（第23図） 調査区東端で検出する。調査区の西壁にほぼ平行に南北に延びる溝である。SD023は断面逆台形で底近くの埋土は粘性の強い青灰色土で滲水の状況を伺うことができる。またSD024は断面不規則に抉れ底面の凹凸も著しい。埋土には粗砂～砂質度が堆積しており比較的激しい流水があったと考えられる。上層の観察からSD024埋没の後大規模な盛り上がりが行なわれそのうちこれを踏襲するようにSD023が掘削されたと考えられる。なおSD024確認面は八女粘土層の上面であるが、この部分が削平によるものか自然の開析作用によるものかは不明確であるが、ピットの深さなどによりSD023西側の遺構が削平により失われていることや東側の9・46次調査の状況などから考えると少なくとも古代以降の人為的な掘削によるものと考えられる。出土遺物からSD023は近世に位置付けられ、SD024は11世紀初頭を前後する時期と考えられる。

出土遺物（第23図） 208～211はSD023出土遺物である。208・209は染付椀である。210は肥前陶器の壺である。211は灰オリーブ色を呈する注口付きの椀である。212～217はSD024出土である。212は白磁壺の頸部破片である。213は越州窯系Ⅲ類の皿である。高台は細く外側に張り出す。全面に施釉され、外底面に目跡が残る。内面には花文が配される。214～216は内黒の黒色土器Aである。214・215は椀で、215の高台は高く外側に張り出す。216は椀である。217は土師器丸底の壺である。摩滅が進んでいるが、外底面はヘラ削りを行なっているようである。

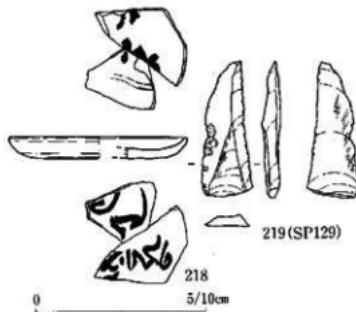
6) その他の遺構と遺物

SP180（第24図） 調査区東側で検出する。深さ30cmで楕円形の掘り込みの東側壁に被熱痕跡と一部に粘土が還元された部分を確認した。埋土は古墳時代後期～古代の遺構に似た暗褐色土で出土遺物はない。住居に伴なうものか単独の構造をもつものは不明である。

その他の遺物（第25図） 218は住居群の上面で出土した土師皿である。内面は回転ナデを行なう。外底面は回転ヘラ削りを行い、全体に布日が残る。また内外両底面には梵字が書かれ、外底面は墨書き、内底面は朱書きされる。外底面は「ウーム」、「ラ」が判読できるが、内底の文字は判読不能である。219は縦長剥片の黒曜石で、両側面に使用痕が残る。



第24図 SP180実測図 (1/15)



第25図 その他の遺物 (218は1/3、219は2/3)

福岡市埋蔵文化財調査報告第714集

那珂 30

—那珂遺跡群第75次調査報告—

2002年（平成14年）3月29日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 有限会社浦永印刷
福岡市東区原田1丁目9-23